

中学校 国語科 部会

部会長名 福智町立赤池中学校 校長 村上 きぬよ

実践者名 福智町立赤池中学校 教諭 金井 友美

1 研究主題

生徒一人ひとりが「わかる・できる」を実感できる授業づくり
～個で考える時間を充分に取り入れたグループ学習の活性化～

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請と新学習指導要領の動向から

新学習指導要領の国語科の目標は、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成する。」である。これを踏まえ、知識・技能の活用、他者を意識した言語活動そして言語活動を活性化させることを意識した授業づくりが求められている。

(2) 生徒の実態から

4月に行った標準学力分析検査の結果は、以下の通りであった。

領域	配点	県標準平均点	学年平均点
聞き取り	14	8.6	9.2
文章の推敲	24	12.7	10.9
説明的文章	38	25.2	25.8
詩	24	10.7	11.4
計	100	57.2	57.3

この結果より、本校の生徒は、県標準平均点に達しているものの、「文章の推敲」の習熟度が低く、課題があることがわかる。文章をよく読んだり考えたりする十分な時間の確保をしたり、友人との意見交流をしたりすることによって、理解が深まると考え、本主題・副主題を設定した。

3 主題・副題の意味

本校は、通常の学級に在籍する生徒の中にも、学習において困難を抱え、支援を要する生徒がいる。そのため、本校では一昨年よりユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導方法・指導体制の工夫改善に取り組んできた。

本年度の学力向上プランは、基礎・基本の習熟と言語活動、振り返り活動の充実に視点をあてて作成している。言語活動においては特に「読む」「書く」活動の充実を目指しており、国語科の担う役割は大きいと考える。

生徒一人ひとりが「わかる・できる」を実感できる授業づくりのために、個で考える時間を充分に取り入れたグループ学習の活性化に取り組んでいきたい。

まず「個」で見つめる、考える時間を授業中に十分確保する。次に対話やグループ活動を通して視野を広げ、新たな見方・考え方を知る交流の場を設ける。また、「わかる・できる」ヒントになる教材機器等も活用していきたい。

「わかった・できた」の発表となる場を設け、自信をつけさせ、学習に対する向上心をもたせたい。

4 研究の目標

個で十分に考えた後、グループで意見を交流する活動を通して、自分の考えや文章を読みを深める学習指導のあり方を究明する。

5 研究仮説

幅をもたせた情景の捉え方ができる詩を、自分の言葉で表現する学習を通して、書く活動の充実を図っていく。そのために、個人で考える時間を確保し、グループでの交流の場を設ける。グループでの交流は、自分の考えとの違いを知ったり考えを深めたりするために有効であると考えられる。表現することが苦手な生徒にとっては、友人の意見を聞くことで、考え方や書き方を学習する場にもなる。グループでの意見交流を通して、言葉の力をつけることができるだろう。

6 研究の計画

(1) 単元 言葉をつなぐ「詩の世界」

(2) 単元の目標及び指導計画

時数	学習活動	教師の支援・援助	評価規準表				伝統的な文化と国語の特質に関する事項
			関心・意欲・態度	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	
1 (本時)	1. 「てがみ」 ・「てがみ」に描かれた情景を考える。	・発問や教材の工夫をする。 ・情景を想像するポイントと難易度を示し、書く意欲を高める。 ・グループでの交流により、自分の考えを持たせたり深めさせたりする。	・意欲的に読み、「てがみ」に描かれた情景を考え、書こうとしている。			・「てがみ」に描かれた情景を文章化することができる。	
1	2. 「太陽」「魚	・前時の学習を思い出させ、	・意欲的に読み、「太			・「太陽」と「魚	

と空」 ・「太陽」 「魚と 空」に 描かれ た情景 を考え る。	情景を想像す るポイント を押さえさ せる。 ・班での交流 により、自 分の考えを 深めさせる。	陽」と「魚 と空」に 描かれた 情景を考 え、書こ うとして いる。		と空」 に描か れた情 景を考 えるこ とがで きる。
---	---	--	--	---

7 指導の実際

まず、既習の「おれはかまきり」の詩と文章化したものを比較させ、詩と文章の違いを挙げさせた。（【写真1】）次に「てがみ」の連の順番を考えさせたり音読をさせたりして読み深めさせた。その後、描かれた情景を想像し、詩を文章化させ、自らの言葉で表現させた。「手紙は誰が書いたもので誰に宛てたものか」「手紙が青くなるとはどのようなことか」など、考えるポイントを提示し、じっくりと考えさせた。（【写真2】）個々で考えた後、3～4人のグループ内で意見交流を行い、自分の考えを深めさせた。（【写真3】）再度個で書く時間をとり、文章化したものを発表させ、全体での交流につなげた。（【写真4】）



【写真1】



【写真2】



【写真3】

てがみ	寺山修司
つぎのうみに	月が出て、夜の海に
いちぎの	一枚の手紙が落ちて
てがみをながして	その手紙は、どんどん
降りました	落ちて、いきました。
つぎのちかりに	流された手紙は、月の光に
てがみをながして	てがみをながして
てがみをながして	青く、暗い海の底に
なるでしょう	しずんで、いきました。
てがみをながして	ひびきかかると
よいものは	そのしずんだ手紙は
みんなたのむ	その手紙を、かいた人の
てがみです	思い出をのせた
	さかたに、のりまじり

【写真4】

学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法	形態	配時
1 詩と文章を比較し、違いを考える。	・「おれはかまきり」の詩と詩を文章化したものを比較させ、なぜ詩は短いのかを考えさせる。【問いづくり】		全体	5
2 本時のめあてを確認する。	めあて：「てがみ」に描かれている場面や思いについて考えよう。			3
3 「てがみ」を読む。	・「てがみ」の連の順番を考えさせたり音読させたり詩を書かせたりする。 ・メトロノームを使い、七五調のリズムに気づかせる。 ・「てがみ」がひらがなで書かれていることに着目させ、「てがみ」に描かれている情景を自分の言葉で文章化することを伝える。		全体	1 2
4 「てがみ」に描かれた情景を考える。	・書くことが困難な生徒には、机間指導を行ったり友人の意見を参考にさせたりして支援する。 ・イラストや写真を見せたり、情景を想像するポイントや難易度を示したりして、自分の考えをつくる。【思考づくり】	・「てがみ」に描かれた情景を考え、書くことができる。 (様相観察・ノート)	全体 ↓ 個人 ↓ グループ	20
5 「てがみ」の情景を再考し、まとめる。	・グループでの交流も参考に自分の考える詩の情景を再考させ、まとめさせる。	・「てがみ」の情景を再考し、文章化することができる。 (ノート)	個人	5
まとめ：「てがみ」に描かれている場面や思いについて想像したことを他の意見を参考にして深め、文章化することができる。				
6 想像した情景を発表する。	・短い言葉で表現される詩は、作者は言葉に工夫を重ね、読者はイメージを広げて読むことができるということに気づかせる。【価値づくり】		全体	5

8 研究のまとめ

本研修では、個人からグループへの学習形態の流れを意識した授業づくりを行うことができた。個々が詩の情景を考えるために、音読や視写等による読み深めの時間を充分取った。個々でしっかりと考えさせることで、グループ交流が有意義なものとなり、更に自分の考えを深めさせることができた。

9 成果と今後の課題

○成果

- ・「個」での取り組みによって、自分の到達度と課題に気づかせることで、後のグループ活動が有意義なものとなった。
- ・対話やグループ活動を通して、新たな見方・考え方を知り、付け加えたり参考にしたりして書くことができた。

●課題

- ・学習形態の時間配分に課題が残った。個での取り組みの時間が不十分であると考える生徒と何も手につかない生徒がおり、どの程度の時間で区切るかのみとりが不十分である。その際の個別の指導・支援が必要である。
- ・「個」で考え、グループで話し合う際に、考えを深める発問とならないことがあった。生徒が自発的に取り組みたいと思える発問の研究が必要である。

◎参考文献

- ・中学校学習指導要領解説 国語編（平成20年） 文部科学省
- ・今から始める一読総合法 児童言語研究会編 一光社
- ・論理が身につく「考える音読」の授業文学アイデア50 桂聖 東洋館出版社